



【真のクリスチャンの姿】

今日の聖書本文:使徒の働き6章 7-15節/暗唱: ピリピ人への手紙1:20-21

説教者: 鄭南哲牧師
(Rev. Jung nam-chul)

アメリカ大陸はヨーロッパから大西洋を渡って行った人々が建てた国々です。ところが、アメリカとカナダがある北アメリカの大陸は世界的に強大国(きょうだいこく)ですが、南アメリカの大陸は大体貧しくて、まだ未開の国々が多いです。このかなりの差はどこから来たのでしょうか?いろいろと理由を探せると思いますが、メキシコ大統領はこう言いました。“北アメリカの大陸と南アメリカの大陸の違いと言えばそれは願望(がんぼう)が違うのだ。”つまり、北アメリカの大陸はイギリスの清教徒(せいきょうとう)たちが信仰の自由のため、神様を求めに来たため、神も見つかり、金も見つかりましたが、南アメリカの大陸はスペイン、ポルトガル人々が金を探しに来たため金も、神も見つかることはできなかったのです。真のクリスチャンの人生は最初は信仰のない人と人生の違いがなさそうに見えますが、後で見ると、その人生がどれほど祝福され、違うのか分かって来ると信じます。

本文は御霊と知恵とに満ちて評判の良い人たちの中で選ばれた七人の執事の一人であったステパノ(冠という意味)の働きを紹介しています。ステパノ執事は特に聖殿やヘブル派のユダヤ人たちではなくギリシャ派のユダヤ人たちの会堂で福音を伝えました。ステパノ執事は聖霊の神の知恵と御霊によって語ったので、誰も彼に対抗することはできませんでした。言葉では勝てない事を知った人々はある人々をそそのかしてステパノがモーセと神のことは汚れているのだと扇動(せんどう)させます。まるで、イエス様にしたように議会にひっぱって行ったわけです。神の真理を守ると言われている宗教指導者たちは怒りと殺気に満ちてステパノを殺そうとしましたが、ステパノは死に直面した状況に置かれても御使いの顔のように輝いていたと表現されています。このステパノ執事の姿から真のクリスチャンの姿とはなにかをともに学べる時間となりますようにお祈りします。

1.ステパノ執事の伝道

本文の9節に“ところが、いわゆるリベルテンの会堂に属する人々で、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジヤから来た人々などが立ち上がって、ステパノと議論した”と書かれています。ここで、“ステパノと議論した”というのはステパノ執事がイエスキリストの福音を伝えたとする意味ですが、いろんな意味を含めています。先週も申しあげたように、初代エルサレム教会からギリシャ語を使うユダヤ人たちのやもめらが毎日の配給からなおざりにされたことによってギリシャ派のユダヤ人たちがヘブル派のユダヤ人たちに苦情を申し立てることが起こりました。当時、ギリシャ派のやもめらはそんなに多くありませんでした。しかし、使徒たちはこの問題を深刻に考え、これを解決するために七人の執事を立たせて、彼らに救済と奉仕を任(まか)せました。おそらく執事たちは救済と奉仕のためにいろんな会堂を訪ねたのではないかと思います。

今日の本文の場所となる“リベルテン(自由)会堂(the Synagogue of the Freedmen)”の由来を調べると、世界各国に散らされていたユダヤ人たちがエルサレム聖殿に行って礼拝をささげることが難しかったため、彼らの信仰と伝統を守るためユダヤ人たちが住んでいるところ、ところに会堂を建てました。歴史家であるヨセフスの記録によると当時、そのような会堂がおよそ480箇所あったそうです。しかし、本文言っている会堂とは少し、特殊な会堂として、エルサレムに聖殿があるので、会堂は必要ないですが、世界あっちこっちからエルサレムに戻ってきた人たちが集まるように、特に、ギリシャ派のユダヤ人たち中心に集まるようになっていた会堂この会堂でした。

参考に、ステパノと議論をした人々はもともとユダヤ人ですが、B.C.53年ポンペイ将軍のユダヤ討伐(とうばつ)によってローマに奴隷として行ってその後自由の身になった人々や子孫だそうです。彼らは周りのいろんな国と都市で住んで、イスラエルに帰ってきたディアスポラユダヤ人でした。特にA.D.20年頃、ティベリウス皇帝(こうてい)がユダヤ人たちをローマから追放しながら、ユダヤ人奴隷も一緒に追放され多くのユダヤ人たちがエルサレムに戻ってきましたが、彼らを“自由人になったユダヤ人”と呼ばれ、彼らが来て集まったところがこのリベルテン会堂だったのです。彼らだけでなく、“クレネ人”はアフリカのリビア北部海岸(ほくぶかいがん)にあるクレネという都市からエルサレムに戻ってきた人々であって、“アレキサンドリヤ人”はエジプトの北側の地中海に(ちちゅうかいがん)にあるアレキサンドリヤ都市からエルサレムに戻って来たユダヤ人を意味します。そして、“キリキヤ”と“アジヤ”から来た人々もいます。このように世界各地から自由人になって帰って来たユダヤ人たちはエルサレムでも仲間同士で集まって暮らしました。

注目すべき点は彼らはみなギリシャ語を使うギリシャ派の人々でした。ステパノ執事が特に彼らにイエスキリストの福音を伝えたのは彼らだけをえこひいきしたのではなく、これからはもはやイエスキリストの福音がイスラエルを越え、全世界に宣べ伝えられていく神様のご計画であったことが分かります。なぜなら、前にも申しあげたように、当時はローマが世界を征服し、支配しましたが、言葉はローマ語ではないギリシャ語が共通語として使われていたので、ギリシャ語を使う人々に福音が伝えられたというのは五旬節以後、イエスキリストの福音が全世界に広がることも大切なきっかけとなることが分かります。

愛する信仰の家族のみなさん! 伝道以外にはイエスキリストを伝える方法も、知る方法もありません。私の家族、私の周り、この国、この民族がイエスキリストを信じるためにはだれかが福音を伝えなければなりません。イエスキリストの福音を伝えないながら、聞いた事もないイエスキリストを多くの人々がどうやって信じる事が出来、救われることができるでしょうか?

ローマ人への手紙 10:13-15節です。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じる事ができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝える事ができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」

まことのクリスチャンの姿はイエスキリストを信じるだけでなく、その救いの真理と愛を伝え、分かち合う人ではないでしょうか。今年、我々もステパノ執事のように聖霊の知恵を求めながら、イエスキリストの愛と福音を伝えることにもっと励む私とみなさん、我々の教会となりますように、それによって救いの喜びと感謝があふれる今年となりますよう祝福します。

2. 御霊がともにおられるステパノの伝道

本文の9節にステパノが福音を伝えるとき“ステパノが福音を伝えるとき”と書かないで、“ステパノと議論した”と書かれています。これを言い換えるとステパノ執事はギリシャ派ユダヤ人として相当勉強をされた方だったので、伝道をするとき、彼が勉強したギリシアの哲学的な方法で伝道したと言う意味です。当時、ギリシア文化においてとても大切なのは雄弁術(ゆうべんじゅつ)です。雄弁術とは言葉で他の人を説得することであって、分かりやすく説明すると“論理的に説明し、弁証すること”です。これを本文では“議論”と言いました。ただ、言葉の争いではありません。ギリシア人は宇宙の起源について、人の起源について、万物の起源についてなどいろいろ討論することが好きだったためステパノ執事もこのような方法でイエスキリストの福音を伝えたとします。我々が学んだ事やできる事すべては伝道の良い機会となる事を忘れないで下さい。

それにもかかわらず本文の10節に“しかし、彼が知恵と御霊によって語っていたので、それに対抗することができなかった。”書かれたとおり、ギリシャ派のユダヤ人たちに自身のあった信念や思考(しこう)、哲学的な論理さえも神様の御言葉を聖霊の知恵で伝えているステパノには勝つことができなかったのです。

みなさん、イエス様はすでにこのような約束の御言葉を与えて下さいました。“また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。”(ルカの12:11)

“どんな反対者も、反論もできず、反証もできないことばと知恵を、わたしがあなたがたに与えます。(ルカ21:15)”

ステパノはイエス様の約束の真実性を立証したわけです。ステパノ執事はきっと天から心強い支援を受けたのに違いないと思います。

信仰の家族のみなさん!ですから、我々が伝道する時心配する必要も、恐れる必要もありません。伝道というのは哲学や論理的な言葉で説得させるものではありません。イエスキリストを伝える前、聖霊の知恵を求めましょう。そして、神様の御言葉を伝え、御言葉がその心に働くようになることを覚えなければなりません。なぜ、そうなるのでしょうか? 神様の御言葉自体に力があるからです。へブル人への手紙4:12にこう書かれています。“神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。”

会堂のギリシャ派のユダヤ人たちが正直で、謙譲の人たちであったなら、ステパノ執事の言う通りにイエス様を信じるべきではないでしょうか。しかし、彼らは正直でもなく、紳士的でもなく、むしろ自分たちが負けたと思ったのか、憤慨しステパノの話が正しいと認めもしませんでした。むしろ、偽りの証人たちを立てて、ステパノ執事を議会に告発して殺そうとする殺意に満ちていました。人間というものはどれだけ罪深い、どれだけ高慢で偽善的なのかここでも見ることが出来ます。当時、イスラエルはローマの殖民統治下にあったので、イスラエル人が自ら死刑を執行する権限はありませんでした。それで、ローマの法に従って、裁判を受けた後、ローマ人の手によって死刑が執行されるのが当時のやり方でした。なのに、この人たちはステパノの説教を聞いたとたん、さらにローマの法に反しながらステパノを殺そうとしたのです。

3. 真のクリスチャンの姿

本文の13節に“偽りの証人たちを立てて”。ステパノは罪がないのに、会堂の人々は偽りの証人を立てて、石打ちして殺そうとしました。しかし8節に“さて、ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざと行っていた。”具体的にはどんなことをされたのか分かりませんが、ステパノ執事はほかの人々のために聖霊の不思議なわざと行おうとすることが出来ました。なのに、いざ自分が危険に置かれて自分のためにはなんの力も行おうとしないで、神様に助けを求めませんでした。むしろ自分の石を投げようとしている人々のために祈りました。

7章、ステパノの殉教直前の姿を見てみて下さい。自分を殺す人々を赦す祈りをささげました。7章60節を見ると、ステパノが殉教される直前までも“そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい。」”自分に向かって石を投げている彼らの罪を赦すようにと祈っています。この姿はルカの福音書23:34でイエス様が最後に十字架の上で祈られたのと同じではありませんか?“そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分で分からないのです。”

我々はイエス様を信じてから、イエス様と似てきたところはあるでしょうか? 我々の祈り、品性、言葉遣い、心、考え、生き方など、どんなところが似て来ているでしょうか? 自分を主の御前で一度振り返ってみる時間を作ってみたらどうでしょうか。我々もステパノの姿のように、いつの間にかだれかからイエス様に似たと言われるならどんなに嬉しいことでしょうか。それこそが真のクリスチャンの姿だと信じます。

愛するクリスチャンブレイズチャーチのみなさん!今日我々がみているステパノ執事はイエス様の姿ととても似ています。これはステパノ執事が真のクリスチャンである事を証してくれることでしょう。本文の15節に“議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。すると彼の顔は御使いの顔のように見えた。”ここで“御使いの顔”はどんな顔を意味しますか? ユダヤ人たちは御使いは人間より格好良く輝いて、美しい顔だと思っていました。聖霊と知恵と信仰と力に満ちていつも神様とともに歩んだステパノの顔が御使いの顔に見えたということは何にもおかしくありません。

聖霊に満たされている人はどんな状況においても全能なる神様にすべてを委ねるためいつも心には賛美と感謝と平安があり、それが表に表されるので、ほかの人から見れば、その人が聖霊に導かれている人だとすぐ分かります。これはただ、詩的にすばらしく、象徴的に言われる言葉ではありません。聖書にも、モーセがシナイ山から神様から与えられた十戒をいただいて持ってくる時、その顔が輝いたと書かれています。そして、ゲッセマネで祈られたイエス様の姿もその容貌が変えられ、その着ていた服も輝いていたと書かれています。御使いの顔のように見えたということはただ、信仰や人格が表される程度ではなく、神様の臨在、神様がともにおられることを意味することです。だからこそ、自分を殺そうとしている人々の前でステパノ執事は決して恐れや怒りなどなんのうらみもありません。これがまさにステパノ執事の姿であり、我々クリスチャンの姿になるべきではないかと思えます。

メッセージを終わらせます。人の顔はその人のすべてを表していると言われていています。今日、鏡でみなさんの顔を一度じっくりとみてみて下さい。お互いの顔を一度みてみて下さい。どうですか?ステパノ執事のように御霊の恵みと知恵と平安と信仰に満ちてますます御使いの顔のように変えられていくクリスチャンブレイズチャーチのみなさんとなりますように祝福します。アーメン!